

市民科の学習プログラム

「学校のトイレを気持ちよく使うために考える」が

児童に与える教育的効果について

村 上 八千世* 酒 井 朗**

品川区の小学校の5年生を対象に「学校のトイレを気持ちよく使うために考える」というテーマで市民科のプログラム（以下、本プログラム）を考え実施した。本プログラムが市民科のプログラムとして適切であるか、またどのような教育的効果が得られるか、さらに本プログラムを実施することで現実に学校トイレが抱える維持管理上の問題を解消することができるかを検証した。プログラム実施の前後で行ったアンケート調査や、プログラムの中で子どもが記述したワークシートの分析から、本プログラムは子どもの自己効力感を高め、責任感、達成感、自立心などを向上させていることが読みとれた。市民科の狙いである社会の一員としての自己の役割を理解し、社会貢献しようとする行動力や問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけさせるツールとして機能していることがわかった。また5年生が本プログラムを実施することで他学年の児童との相互作用が生まれ、5年生だけでなく全校児童のトイレ利用に対する意識が啓発され、本プログラムは学校のトイレが抱える問題の解消手段として機能していることもわかった。

1. はじめに

(1) 品川区の「市民科」導入

価値観が多様化する近年では個性を発揮することを求められる一方で、所属する社会の中で個人はその責任と義務を求められ、社会や地域への一層の参画を期待されており、「市民教育」というものが注目されている。

品川区の小中学校では小・中一貫教育の導入とともに、平成18年度より区内全校で「市民科」が新設された。特別活動、道徳、総合的な学習の時間を一つの教科として組み替え、年間70～140時間を割く。同区の場合も市民科導入の背景には、子どもたちが自分の将来について理想をもてないこと、規範意識や公共心の低下、いじめ・不登校の増加、家庭でのしつけ機能の低下などへの危機感があつた。そんな中で子どもたちにこれから社会を生き抜いてもらうために、よりよい自らの在り方や、生き方を探求し続けようとする強い意思と同時に、積極的に社会の発展に貢献しようとする

能力を身につけさせようと叫ばれている。

品川区の掲げる「市民科」の目標は「自分自身にとっての真理を求め続け、自ら生きる道筋を見つけさせる能力の習得と、社会における規律・規範を重んじる自己抑制力とそれを支える倫理観、そして将来の理想を実現させていくための方法など、本当の意味で生きる力を育てようとするもの」である。これらの目標を達成するために「市民科」では①個にかかわる-「自己管理」、②個と集団・社会をつなぐ-「人間関係形成」「自治的活動」、③社会にかかわる-「文化創造」「将来設計」、これら3段階、5領域を設定しており、さらに身につけさせたい能力として具体的に15の能力を掲げている。一貫教育の9年間のうち、第5学年から第7学年では、特に家庭や社会における自己の役割を理解させ、進んで集団や社会に貢献しようとする社会的な行動力の基礎を身につけさせることや、学校・地域社会における生活上の問題を見つけ、個人や集団・組織で問題解決を行う実践的な能力を形成するなど、自己と集団・社会をつなぐために自治的活動の原理・原則を教え、社会的行動力の基礎を育成すること、すなわち

キーワード：市民科、総合的な学習の時間、トイレ、自治的活動、小学生

* アクトウェア研究所 ** お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

「自治的活動」「文化創造」に重点を置いている。

本プログラムは市民科本格導入の前年度に実施しており、翌年の導入を視野に入れながら、「総合的な学習の時間」で試みたものである。

(2) 施設管理と「市民科」

本プログラムはトイレの維持管理をテーマに子どもたちに市民科でめざす能力を身につけさせようというものである。

大都市の小学校では、子どもに学校のトイレ掃除をさせないところが少なくない。現在東京都23区内の小学校では、基本的に児童はトイレ掃除を行わないことになっている。その理由は定かではないが、学力強化を優先させるためや衛生上の問題などが考えられる。今回プログラムを実施した品川区立城南小学校でも日常的にはトイレ掃除は用務主事が行い、子どもは参加していない。子どもがトイレ掃除に参加しなければ、教員も指導の必要がないため、トイレの維持管理に対して子どもと共に関心が向きにくくなっている。

しかし、自分たちで使う施設やモノを、自分たちで責任をもって管理できるようにするということはまさに市民科の理念に合致し、公共心を育てるための絶好の機会である。自らが掃除を行うことによって自らの利用態度を振り返ることができ、利用マナーを改めたり、掃除の方法を工夫したり、他者の利用方法について指導・啓発活動を行うなど発展させて考えることができる。このように施設管理への児童の参加は校内で起こる日常的な問題に適切に対応できる能力や資質の発達を促し、社会の一員としてどのように行動すべきかという基軸を教える機会となる。豊かな教育的効果が期待でき、「市民科」のテーマである「自治的活動」「文化創造」にもよく当てはまる。

持田(2000)は子どもの家事離れを例にとって、「子どもは将来に備えて学ぶ、あるいは遊ぶ存在である」という意識が彼らを仕事から分離させている」と指摘し、また、「仕事」について「近代以前の人々は子どもが働くことを至極当然のこととし、しかもそれは将来のための訓練としてではなく、その時々にならぬ責任を委ねて、『自分』の社会の中での位置を認識するような形で社会化をもたらし、かつ共同体成員としての社会化もなされていた」と述べている。現代の学校での子どもの「トイレ掃除」離れについても同様の見方ができるし、トイレ掃除がもつ「仕事」としての役割も見直すべきである。

(3) 学校のトイレ環境が抱える問題

学校トイレの利用についてのアンケート調査の結果によると子どもたちの学校トイレに対する嫌悪理由は「くさい」や「汚い」という要因が圧倒的に多い(村上・根ヶ山, 2004)。そこで改修工事が盛んに行われるようになったが、トイレがきれいになり、一旦は問題が解消しても、瞬く間に元のくさく、汚い状態へと戻ってしまうことが多いのである。せっかく莫大なコストをかけても、結局は子どもにとって行きにくいトイレにすぐ戻ってしまうのである。この原因には、主に子どもたちの利用マナーが低いこと、子どもの掃除離れによる無関心さ、教員の指導不足による維持管理の不徹底、さらに少子化に伴う掃除当番の割当て人員不足などがある。「トイレ掃除」を学習プログラムの中に組み込むことで、これらの問題が解決すれば一石二鳥であるし、実践的なプログラムとなりえるだろう。

それから、学校トイレの問題にはメンタルなものもある。小学生では高学年になると学校で排便することに「恥ずかしさ」を感じる子どもが増え、排泄を我慢する要因となっている(村上・根ヶ山, 2004)。これには、排泄は単に汚く、くさい行為であり、トイレも汚く近づきたくない場所という認識が影響していると考えられる。直接的ではないが、自らがトイレの問題にかかわることで、トイレや排泄に対する関心や理解が深まれば、排便することに対する過剰な羞恥心は緩和されるのではないかと考えた。

(4) トイレ掃除の実技指導の経験から

筆者は小学校に招かれて、トイレ掃除の実技指導を行うことがしばしばある。実技指導であるので、対象人数には自ずと制限ができ、たいてい場合には高学年の美化委員などが指名されて指導を受けることになる。指導を開始するときはおおかたの子どもの表情に、「なぜ、自分がこんな役目を負わなくてはならないのか」「トイレ掃除だなんてついてない」というような不服の表情が読み取れる。しかし、これが一旦掃除を実際に始めてみると目の色が変わり、指導が終わるころには、何か自信を勝ち取ったような満足感に溢れた表情に一変する。そしてこのような子どもの変化は、掃除の効果が高かったとき(たとえば便器の汚れがきれいに落ちたとき)に顕著であり、また他の子どもからの賞賛の声があるとさらに掃除をした子どもを感動させるということが見受けられた。このようなことから「トイレ掃除」を通して子どもたちの自己効力感、達成動機を高めるよい機会になっていると確信した。

総合的な学習の時間ではテーマを学校の外の環境に求めることが多いが、「トイレ」のように身近で、しかも子どもたち自身が直接所属する社会の運営と実質的に結びつくテーマを取り上げることには大きな意味があるのではないかと考えた。

2. 目的

本研究では「学校のトイレを気持ちよく使うために」をテーマとして構成した学習プログラムが「市民科」のプログラムとして有意義であるかどうか、そして「トイレ掃除」を学習のプログラムに組み込むことがどんな効果をもたらし、また同時に学校のトイレが抱えている問題を実践的に解決する手段として有効であるかどうかを確かめることを目的としている。

3. 方法

(1) 対象, 実施時期

品川区立城南小学校5年生の男子18人, 女子20人。
2006年2月～3月に実施。

城南小学校は平成16年に創立130周年を迎えた伝統ある学校である。周辺地域は商店や寺が多く、祭りなどが年中行事として盛大に行われ、下町の雰囲気を残す都心の小学校である。全校児童数242人で、各学年は学級数が1～2クラスであり、5年生は1クラスであった。小学校の敷地内には区立の幼稚園があり、園児との交流や異学年交流、中学校との交流を積極的に行っている。

(2) 学習プログラムの概要

今回行った学習プログラムの各回の内容は表1のとおりである。授業の進め方は基本的に子ども側から出たアイデアや考えを尊重し、それを実現するやり方で行った。進行は基本的に担任が行い、必要に応じて筆者がサポートに入った。授業時間内に終了できなかった作業は宿題や予備の時間で対応した。

(1回目：導入)

ほとんどの子どもにとって「トイレ」のことについてじっくりと考えるのは初めての経験であり、概ね良い印象をもっていなかった。1年前にほぼ同様の学習プログラムをやはり5年生に行ったときは「なぜトイレのことなんか勉強するの?」「トイレの話ばかりだ

と気分が悪くなる」という意見が非常に強かった。今回のクラスではその点を踏まえプログラム1回目の導入のときに「トイレの大切さ」「排泄の大切さ」について講義し、トイレについて感心を持ちやすいように配慮した。また他校のトイレに関する取り組みを紹介した。トイレ掃除を自分たちで行う事例、トイレの改修に向けて子どもたち自身が意見や要望をまとめる事例、子どもたちがトイレのデザインを考える事例など数例を話した。そして現在子どもたちが学校のトイレについて困っていること、不便に思っていることをあげさせ、その原因が何かを考えさせた。さらに、自分たちだけでなく全校児童が学校トイレに対してどう考えているのかを調べることを促し、その手段として、アンケート調査が子どもたちより提案された。

(2回目：調査・分析)

各グループに別れ、それぞれが他の学年の1クラスずつを担当し、アンケート調査を行った。調査にはアンケート用紙の作成、調査の依頼と説明、集計、分析という一連の作業が伴った。アンケート用紙を作成する際、その結果をどのように活用するのかまでは考えが及んでいなかったため、設問を考える際に具体的にイメージしにくいようであった。アンケート用紙はこの時間までに完成させておいた。低学年担当のグループは難しい漢字を使用せず、ひらがな表記にするなど、対象に合わせたわかりやすい表現方法を独自で工夫していた。グループのメンバーで調査依頼時のあいさつ、説明、配布・回収など分担を決め、アンケートの依頼に出向いた。子ども達は依頼や説明をしたことに対する相手の反応に関心をもち、しっかり聞いてくれたか、理解してくれたか、うまく説明できたかについて言及する感想が多く見られた。すぐにアンケート用紙を回収し、集計作業を行った。集計結果をグラフ化し、結果から何が分かるかを分析した。結果をグラフに加工することを難しく感じる子どもが少なくなかったが、「なぜ、算数の時間にグラフを習ったかがわかった」というような感想もあった。アンケートの結果は「ふつう」などの選択肢を選ぶ回答が多く、5年生にとって分析しにくいものになってしまった。アンケート用紙の分析を効果的にするには「ふつう」などの中間的な選択肢を除外するなど教員側からアドバイスをするべきであった。それでも子どもたちはそれぞれの問いの結果を関連付けて考え、分析のための議論はしっかりできていた。各グループで作成したアンケートの項目は統一されたものではなかったが、それ

表1. 学習プログラムの概要

回	月日	狙い	市民科で身につけさせたい能力と整合するもの	授業内容
1	2月16日(木) 3、4時間目	<ul style="list-style-type: none"> 導入ー 子どもの関心をトイレへ向ける 問題把握ー 何が問題か理解させる 調査計画 自分たちの考えだけでなく、学校全体でどうなのかを理解させる 	<ul style="list-style-type: none"> 責任遂行能力 自他理解力 コミュニケーション能力 	<ul style="list-style-type: none"> 学校のトイレ、他の学校での取り組みについて説明 自分たちが学校のトイレで困ることはどんなこと <p>↓</p> <p>他の学年はどんなふうになっているだろう？</p> <p>↓</p> <p>アンケート調査をしよう！ アンケート用紙作成 依頼時の説明の練習</p>
2	2月21日(火) 朝学習+ 1、2時間目	<ul style="list-style-type: none"> 調査依頼・実施 調査を依頼するための工夫、表現方法を考えさせる、役割分担や時間的配分を考えさせる。 調査集計・分析 集計結果のグラフ化、分析結果の読み取り方を考える 解決策の検討 対策案について意見を出し合う 	<ul style="list-style-type: none"> 自治活動能力 道徳実践能力 社会的判断・行動能力 	<ol style="list-style-type: none"> アンケート実施(朝の時間) <ul style="list-style-type: none"> 班ごとに各学年に依頼に行く アンケート集計 集計結果から問題点について意見を出す。気持ちよくトイレを使うために自分たちでできることは何か 対策案を出す <ul style="list-style-type: none"> アンケート結果のフィードバック ポスターの作成 使い方の指導 トイレ掃除
3	2月23日(木) 3、4時間目	<ul style="list-style-type: none"> 対策案(アンケート結果報告、ポスター作成)実行の準備(1) 相手の立場に立って、訴求方法、わかりやすさの工夫をさせる 	<ul style="list-style-type: none"> 文化活動能力 企画・表現能力 自治活動能力 	<p>前回決めた対策案を実行の準備</p> <ul style="list-style-type: none"> アンケート結果の他学年への報告準備 ポスター作成 使い方指導準備
4	3月2日(木) 3、4時間目	<ul style="list-style-type: none"> 対策案実行の準備(2) 情報収集 対策案(掃除)実行のための情報収集、人の意見をきく 		<p>対策案の実施に向けて準備の続き</p> <ul style="list-style-type: none"> トイレ掃除の準備(主事さんと掃除の専門家に話を聞く)
5	3月8日(水) 3、4時間目	<ul style="list-style-type: none"> 対策案(掃除)実行 掃除方法の工夫、やりとげる根気強さ、協力、 	<ul style="list-style-type: none"> 社会的役割遂行能力 自己修養能力 責任遂行能力 自治的活動能力 社会的判断・行動能力 	<p>トイレ掃除実施</p> <p>それぞれが便器を分担して磨く。便器1個につき1人～2人で担当。</p>
6	3月16日(木) 昼時間+5時間目	<ul style="list-style-type: none"> 報告・発表 これまでの調査や活動について他学年に報告発表する 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション能力 責任遂行能力 自他理解能力 自治活動能力 社会的判断・行動能力 企画・表現能力 	<p>各学年に報告、発表</p> <p>まとめ、今後の継続について</p>
		<ul style="list-style-type: none"> 評価を受ける 他の学年からの評価 	<ul style="list-style-type: none"> 社会的役割遂行能力 社会認識能力 	<p>5年生の活動に対する他学年の感想をアンケート調査する(教員による)。</p>
7	3月20日(月)	<ul style="list-style-type: none"> 評価に対する感想 今後に向けて 		<p>結果を受けて5年生に感想を書いてもらう。</p> <p>授業は今回で終わるが、今後どうするべきかを話し合う。</p>

ぞれのグループの結果から、「きれいに使っている」と答える人が多いのに、「トイレが汚いと思う」と答える人が多いという矛盾が浮かび上がってきた。そこから「ほんとは個人個人が使い方をよく分かっていないのではないか」という意見が出て、啓発してゆくことが必要であるということになった。また「トイレが汚いのは、自分たちの使い方が悪いからで、自分たちで汚したものは自分たちできれいにすべきだ」という意見も出た。そして対策案として、まずこのアンケート調査の結果をそれぞれの学年に報告し、実態を知ってもらうこと、トイレの利用方法について注意・指導すること、ポスターを作り、トイレ内に掲示すること、自分たちでもトイレ掃除をすることが決まった。

(3, 4 回目：対策案実行準備)

3 回目ではアンケート調査の結果報告やトイレの使い方指導のためのツールを作成。グラフを大きな紙に描いたり、和式便器の座る位置を指導できるように便器と足型の絵を作成した。また、トイレ利用の注意を記したポスターを作成した。発表のシュミレーションを時間内に行った。どうしたら人の目を引きやすく、わかりやすくなるか発表ツールのデザインに工夫があった。4 回目では掃除の準備として、主事さんから日ごろの掃除で大変なこと、掃除のコツなどお話を伺った。さらに具体的な掃除道具の使い方や手順について専門家(筆者)からガイダンスを受けた。主事さんの話からは、作業の大変さを感じ取り、感謝の言葉を感想に残す子どもが多かった。また、具体的に清掃方法を指導されることで、掃除活動に期待をもつ子ども、腰が引ける子どもがそれぞれいた。

(5 回目：掃除実行)

各グループで校内のトイレを一箇所ずつ分担し、1～2人で便器を1個ずつ分担できるようにした。はじめに専門家より作業のポイントを示して見せた。時間中、ほとんどの子どもが懸命に器具や床を磨いた。終了後、掃除をする前と後の感想をそれぞれワークシートに記入してもらった。「トイレ掃除はやってみると意外にも楽しかった」という意見が多かった。

(6 回目：報告・発表)

これまでの活動をまとめて、各グループごとに担当した学年クラスへ出向いて、報告・発表を行った。分かりやすく伝えるために説明の方法、声の出し方、ツールの使い方、時間配分などに工夫があった。終了後の

ワークシートには、聞き手にうまく言いたいことが伝わったかどうかを気にする記述が多く見られた。「しっかりとアンケート結果を伝えましたが、3年の人はしっかり聞いてくれたかが心配です」「2年生は静かで発表しやすかった。最後に大きな拍手をしてもらいうれしかった」「暗記できなくて、いっばいつかえたのが残念だった」「遅刻してくる子がいて、全員に聞いてもらえなかったのが残念だった」「みんなつまらなそうだった」などの記述があった。また、発表することで自分でも結果をよりよく理解できたようだ。「アンケート結果を調べて、自分でも問題がよく分かった」との記述があった。

(7 回目：他学年からの評価と今後)

活動が一通り終了した時点で、5年生の活動に対する感想をアンケートで他学年の児童に答えてもらった。設問は「Q1:5年生の話(発表)はよく分かりましたか?」「Q2:5年生からトイレの話の聞いたり、掃除などをしたことを聞いて、トイレをきれいに使おうと思いましたか?」「Q3:5年生が学校のトイレについて調べたり、トイレ掃除をしたことについてどう思いますか?」(以上選択肢)、「Q4:5年生に対するメッセージを書いてください」(記述式)の4問であった。他学年からの感想はほとんどが5年生に対する感謝など好意的な内容のものであった。この結果を受けて5年生がどのように感じたかをワークシートに記述してもらった。5年生の感想は、「こんなに感謝されると思っていなかった」「よろこんでもらえてうれしい」という感動の記述が多かった。

すべてのプログラムを終えて、今後の活動について話し合ったときには、「掃除当番」を作り、定期的に掃除を行ってゆこうという意見が出て盛り上がった。実際に掃除当番ができれば、ぜひ当番になりたいと言う子どもも少なくなく、子ども達の自主性を感じた。

(3) プログラム各回のワークシート分析

本プログラムの各回の中で子どもが記述したワークシートを基に「トイレ掃除」の前後における子どもの意識の変化や、他学年の評価を受けた5年生の反応を分析した。

(4) 「本プログラム」の事前事後の子ども意識の変化

表1のプログラムを開始する前と終了した後で、同じアンケート調査を5年生に対して行い、本プログ

ラムが子どもの意識にどのような変化をもたらしているかを調べた。14の間に、まったく思わない(1点)～すごく思う(5点)の5件法で評定を求めた。設問項目の1～7は子どもの達成動機測定尺度(森・堀野, 1997)を参考に、子どもの自分自身で所属する社会のために役に立ちたいという気持ちが育っているかをみるために独自に設定し、8～14はトイレ利用や維持管理に対する関心が深まったかどうかをみるために独自に設定した。調査はクラスの担任に依頼し実施した。

4. 結果と考察

(1) 「トイレ掃除」の前後における子どもの意識の変化

プログラム5回目のトイレ掃除を終了した後、子どもに掃除前後の気持ちの変化を自由記述でワークシートに書き込んでもらった。記述より「いやだ」「気持ち悪い」という趣旨が読み取れた場合は「否定的」というカテゴリーに、「おもしろい」「楽しい」という趣旨が読み取れた場合は「肯定的」というカテゴリーに、「難しそう」「どんな道具を使うのだろう」など「肯定的」とも「否定的」とも受け取れないものは「どちらともいえない」というカテゴリーに分類した。ワークシートの提出が無かったものが3名分あり、有効回答数35で分析を行った。

分析結果は表2に示した。男女とも掃除前は掃除に対して否定的な気持ちを示している子どもが多いが、掃除後は肯定的な気持ちを示した子どもが多かった。掃除前に否定的な気持ちを示していても、掃除後には肯定的な考えになるという変化が読み取れた。それぞれの記述内容を分類したものが表3である。

表2. トイレ掃除の前後における子どもの意識の変化(N=35)

	掃除後			合計	
	肯定的	否定的	どちらともいえない		
掃除前	肯定的	6	3	3	12
		17.14	8.57	8.57	34.29
	否定的	15	1	1	17
		42.86	2.86	2.86	48.57
	どちらでもない	4	1	1	6
	11.43	2.86	2.86	17.14	
合計	25	5	5	35	
	71.43	14.29	14.29		

(上段は度数, 下段は全体に対する割合)

掃除を実施する前は【期待】や【きれいにしたい意欲】

のような感想も見られるが、やはり否定的な【嫌悪】【拒否】や【未知・不安】のような感想が多かった。掃除後は掃除前に比べ記述が具体的で、多様な感情をもたらしていることがわかった。「おもしろかった」や「きれいになってよかった」など単に作業に対する【満足】や【きれいになったことへの喜び】を表すだけでなく、「大人に進歩したと思う」のように何か自信を獲得したことを思わせる【成長の実感】を表した記述などが見られた。また自らが作業することで、日ごろ掃除を行っている主事さんへの【感謝の気持ち】、思うようにできなかったことに対する【責任感】、「家のトイレもそうじしてみたい」のように、今回の経験を家庭での【発展・応用】に活かしてみたいという意思表示の記述があった。やってみたら【意外なおもしろさ】を感じたという表現も多く、掃除をする前は未知な部分が多く、不安でやりたくないと思っても、実際にやってみることで印象がすっかり変わってしまうこともあるのだということを理解できたのではないかと思う。グループで作業を行うことによる【協力・コミュニケーション】の楽しさを記述する子どももいた。せっかくトイレをきれいにしたのだから、それを持続させたいという気持ちが「きれいに使ってほしい」「きれいに使おうと思った」という【自立・他者啓発】の記述になり、自分たちが行ったことに対して他者がどのように評価するのかという【評価の期待】は、一生懸命やったことが人の役に立ってほしいという貢献願望であると考えられる。作業に対する【大変さの実感】からは汚れと格闘する大変さが読みとれ、【拒否感】からは、やってみたもののやっぱりいやだったという気持ちが読みとれた。

実際、掃除前は掃除に対して否定的に考えていて、掃除後に肯定的な気持ちに変化した子どもの記述を見ると、掃除前の「人が使っている便器を掃除するのはいや、ぞうきんを使うのがいやだな」から掃除後の「きれいになったら気持ちがいい、がんこな汚れがとれてきたらうれしかった」へと変化している。

一旦掃除が始まると、汚れを落とすことに夢中になり、終了の時間を越えてもまだ便器にしがみついて磨いている子どもが少なくなかった。汚れがどんどん落ちて、対象が「変化」してゆく様子は、子どもたちに大きな達成感を感じさせるようだ。筆者の経験上、この「変化」が激しいほど子どもに与える感動も大きいので、掃除方法やスキルをしっかりと指導することがプログラムを効果的にするポイントであろう。

表3. トイレ掃除前後の子どもの気持ち

(掃除前)	(掃除後)	
<p>【期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しみだった ・おもしろそう ・どきどきした ・わくわくした ・楽しそうだけど、きたなそう <p>【きれいにしたい意欲】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やるだけやりたい ・きれいにしたい ・ちょっとやる気が出た ・やりたくてうずうずした ・みんなに気持ちよく使ってもらうために掃除をしようと思った ・びかびかになったらいい ・床が一番汚いからがんばって掃除をしよう <p>【嫌悪など】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・めんどくさい ・汚い ・きもちわるい ・汚れたくない ・くさそう ・びみょう ・つまらない ・すぐあきる <p>【拒否】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたくなかった ・いやだった ・掃除をしたことが無いのでいやだった ・人が使った便器を掃除するのはいやだ ・雑巾を使うのはいやだ ・きれいじゃないと思ってやりたくなかった <p>【未知・不安】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単そう ・難しそう ・家のトイレと学校のトイレはどっちが大変なんだろう ・大変かなあ、大変じゃないかなあ ・きれいかなーと思ったけど意外と汚かった ・大変ではなさそうと思った ・大変そう ・とても汚れていそう ・きれいになるか心配だった ・汚れはすぐに落ちると思った ・3人でどれだけきれいになるのか ・どんなよごれがあるのだろう ・すぐに終わると思った ・全体的にきれいでやるところがあるのかなと思った ・きんちょうした ・トイレの汚れが少しついていて排水口のさびがたくさんついていて 	<p>【満足】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった、またやりたい ・やりがいがあった ・もっとやりたい ・すぐおもしろかった ・超きもちいい <p>【きれいになったことへの喜び】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・びかびかにしたことが気持ちよかった ・終わったときすっきりしてとてもうれしかった。 ・きれいにするのは大変だったけどおもしろかった ・頑固な汚れが取れたときはうれしかった ・きれいになってよかった ・きれいになったら気持ちがよい ・トイレ掃除をやったあとはすぐ気持ちがよい ・細かいところまでみがけてよかった ・トイレの地面がびかびかで気持ちよかった ・配水管が汚かったけどいっぱい取れてよかった <p>【意外なおもしろさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初はいやだったけど、やっているうちに楽しくなってきた。 ・やりだしたら、とまらなかった ・トイレ掃除は意外と楽しかった、またいろんな面でがんばりたいです。 ・やってみたらあんがい楽しかった ・ぜんぜんあきなかった ・途中から一生懸命できてよかった ・意外と普通だった ・表はきれいだったけど、隠れているところが汚くて気持ち悪かった、でもやっているうちに慣れてきてきれいになるのが楽しくなりました。 ・ちょっとだけやろうと思っていたのに徹底的に全部やった。 ・やっているうちに楽しくなってきた、でももうやりたくない。 ・いろいろな道具を使って楽しかった <p>【協力・コミュニケーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで協力できてよかった ・みんなとやって意外と楽しかった ・けんかしたけど、できたことがよかった <p>【成長の実感】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いい経験になった ・大人に進歩したと思う <p>【発展・応用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家のトイレもそうじしてみたい ・家でも頼まれたらやろうとおもった ・トイレ掃除はこれからも家でやろうと思った ・トイレ掃除は毎日やらないといけないうちとおもった。 	<p>【責任感】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最後までできなくて残念 ・少し汚れが残っているところがあったので残念でした ・楽しかったでも、トイレの汚れが落ちないところがあって少しいやだった <p>【感謝の気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも主事さんがやっているが、ぼくたちでやったら気持ちよかった。 ・主事さんはいつも一人ですごいなと思いました。 <p>【自立・他者啓発】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなにもきれいに使って欲しいと強く感じた ・これからトイレをきれいに使おうと思った ・なぜ汚くなつたんだろうと思った <p>【評価の期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の人が見てきれいに思ってくれるか楽しみ <p>【大変さの実感】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小便器は汚れが落ちにくかった ・難しかった ・ゴム手袋が黄色くなってびっくりした。 ・すぐく時間がかった ・表はきれいでも、隠れているところに汚れがあった ・なかなか汚れが落ちなかった ・結構大変だった ・そうじはとても大変だと思った ・汚れがひどくて大変だった <p>【拒否感】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くさかった ・気持ち悪かった ・鳥肌がたつてしょうがなかった、もうしたくない。 ・もうやりたくない ・疲れた、楽しくなかった

(2) 他学年からの評価と5年生の反応

本プログラムの6回目を終えたところで、5年生の活動についてアンケートにより他学年の児童に感想を聞いたところ図1のような結果が得られた。5年生の発表は概ね「わかりやすく」、5年生の発表を聞いたことで「トイレをきれいに使おうと思った」と答える子どもが8割を越え、5年生の活動に対して感謝の気持ちを示した子どもが8割近くいた。

さらに自由記述式の設問で、「5年生へのメッセージ」を書いてもらったが、ほぼ全員が丁寧に書き込んでおり、感謝と感動の度合いが伺えた。表4はその明細である。これらの結果は本プログラムを通して5年生が他学年に対して行った発表やトイレ掃除などの活動の成果といえる。学習のテーマは「学校のトイレを気持ちよく使うために」であるから、他学年の児童

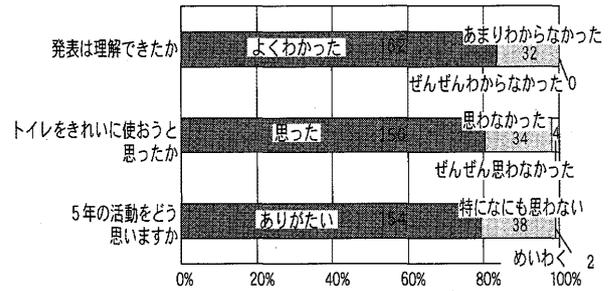


図1 全校生徒の5年生の活動に対する感想 (N=194)

の多くが「トイレをきれいに使おうと思った」と答えているということは学習の成果が実践的に学校という社会で役立ったと考えることができる。

他学年からの5年生へのメッセージの中には、感謝

表4. 全校児童の5年生へのメッセージ (メッセージの末尾の数字は類似回答数)

<p>【感謝の気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレのことを教えてくれてありがとう ・ありがとう 6 ・トイレをきれいにしてくれてありがとう 51 ・5年生がそうじをしてくれてうれしかった ・そうじをしてくれてありがとう. 22 ・教室ではじめて5年生がトイレ掃除をするときいてびっくりしたけど、ありがたいと思いました。 ・最初からすごくトイレはきれいと思ったけど、こまかいところまで掃除をしてくれてありがとう。 ・トイレに入れなかったことはちょっと悪かったけど、トイレ掃除してくれてありがとう。 ・5年生がそうじをしてくれたので、きれいになりました。とてもうれしかったです。 ・トイレはすごく汚かったのでトイレをきれいにしてくれてとてもうれしいです ・5年生はトイレの掃除をしてとてもすごいと思いました ・私はトイレを汚いと思っていたので掃除をしてくれて良かったです。 ・トイレ掃除ご苦労様です。 4 ・みんながいやがるようなことしてくれてありがとう 2 ・私たち(6年)が去年やったことを5年生もやってくれてうれしいです。 ・トイレだけでも掃除することはいいことだと思った ・よくトイレ掃除ができたなと思った ・5年生がトイレのことでがんばっているんだと思った ・ずいぶんきれいになった気がした 2 <p>【これからもお願いします】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからもトイレそうじをよろしくお願いします 5 ・これからもトイレをきれいにしてください 4 ・すごくうれしくなったのでぜひがんばってください ・トイレの話をしてくれてありがとう。またトイレのことを教えてください ・がんばってください ・トイレをもっときれいにしたい。トイレがくさい(少しだけ) 	<p>【発表についての評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表がきやすかったです。 ・発表がとてもすばらしいと思った ・和式の使い方やいろいろ教えてくれてありがとう ・話がよくわかった 2 <p>【意志表明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちが5年生になったらトイレをきれいにします。 5 ・5年生の話を聞いてトイレをきれいに使いたいと思いました 9 ・私たちが5年生になるとトイレの勉強をするので、とてもよいと思いました。 ・ぼくたち(6年)も昨年やったのできれいにつかうことを心がけています。 ・トイレをきれいにすることはすごいいいことで、みんなきもちよくトイレに入れると思う。 2 ・私たちがそうじをした後はきれいに使っていたので、5年生もきれいに使ってください。 <p>【質問】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレにうんちがのこっていたら、どうしたらいいんですか？ <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あのトイレカードはどうやって作ったんですか？ ・ハエの死体がときどきあります。 ・城南小をきれいにしたということはすきになりました
---	--

の言葉や励ましの言葉、自分たちも5年生になったらがんばりたいという意志表明などがあつた。そしてこの他学年のアンケート結果やメッセージを5年生にフィードバックする際はプリントにして配布したのだが、本プログラムの授業の中で、「トイレ掃除」の実技時間と並んで5年生がより真剣な表情を見せた時間であった。メッセージが印刷されたプリントを隅から隅までしっかりと食い入るように目を通しており、他者からの評価に対する興味の度合いが伺えた。

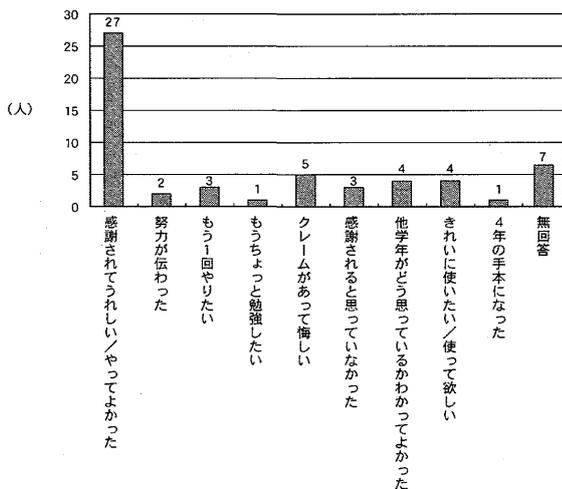


図2 評価後の5年生の感想 (N=38)

これらの評価を受け、5年生がどのように感じたか自由記述したものを分類してまとめたのが図2である。

5年生の感想では「感謝された」ことに対するうれしさを示す記述が9割近い子どもに見られた。

また、掃除後の感想が「否定的」「どちらともいえない」であつた子どもも評価後の感想では「やってよかった」という書き込みをしている。たとえばある女子は掃除後の感想で「鳥肌がたつてしょうがない、そうじはもうしたくない」と書いていたが、評価を受けた後は「トイレ掃除をしてよかったなあと思いました。ありがとうございますと言つてもらつたらなんかうれしかったです」という記述を残した。他者からの評価を受けることでトイレ掃除の印象がすっかり変わってしまったことがうかがえた。

本プログラムは、5年生と他学年の間で何度もやり取りが行われる内容になっている。5年生から他学年に対するトイレ利用アンケート調査、その結果発表、他学年からの5年生に対する評価というように、他学年の児童は単なる傍観者ではなく、本プログラムの

共演者となっている。そのためこの学習プログラムによって5年生のみならず、他学年の児童にも影響を与えていることになった。

(3) 「本プログラム」の事前事後の子どもの意識の変化

結果をまとめたのが表5である。

効果が本プログラムのみから起因すると判断することは当然できないが、関連があると考えられるだろう。

結果はすべての項目で平均値は事前より事後のほうが高く、それぞれの項目においてプログラム終了後に意識が高まつたといえる。

事前と事後の平均値の差の検定(t検定)を行ったところ、その差が有意である項目がいくつか見られた。1～7の項目で差が有意であつたのは、「人のためになることがしたい」「人からありがとうって言われるとうれしいと思う」「自分がしたことで人が喜ぶとうれしい」など他者からの評価や反応に関わる項目であり、プログラムの中で行った他学年からの評価を受けたことが大きく影響していると考えられる。8～12の項目で差が有意であつたのは「学校のトイレをきれいに使おうと思う」「学校のトイレで自分で汚したところは自分できれいにしようと思う」など自分自身の行動に責任を持ち行動を改めようという内容のものであつた。さらに13～14の項目はトイレ利用時のメンタルな問題に絡む部分であるが、これらに関してもそれぞれ事後の平均が増加しており、「学校のトイレで大便するのははずかしくないと思う」の項目は差が有意であつた。これは本研究だけではなんともいえないが、トイレを気持ちよく使おうと考えたり、活動することが、おのずと排泄のことにも理解を深め、トイレ利用時に感じる子どもたちの「恥ずかしさ」も軽減するのではないかと考える。汚いと思つていたトイレを自分で掃除するという強烈な体験をすることが、「恥ずかしい」という意識に変化をもたらすのかもしれない。

表5. 事前事後の子どもの意識の変化

		平均 (事前)	平均 (事後)	t 値	自由度	
1	人のいやがることでもすすんでやろうと思う	2.74	2.89	-1.00	37	
2	人のためになることをしたいと思う	3.39	3.82	-2.92	37	**
3	自分でくふうすることが、すきだと思う	2.89	3.37	-3.52	37	**
4	こういうことがしたいなあと考えたとわくわくする	3.66	3.84	-1.23	37	
5	困った人がいたら相談にのってあげようと思う	3.42	3.68	-1.82	37	
6	人から「ありがとう」っていわれるとうれしいと思う	3.71	4.16	-3.33	37	**
7	自分がしたこと、人が喜ぶとうれしい	3.61	3.97	-3.03	37	**
8	学校のトイレをきれいに使おうと思う	3.63	4.26	-4.13	37	**
9	他の人にも学校のトイレをきれいに使ってほしいと思う	3.53	4.34	-4.98	37	
10	学校のトイレで、自分が汚したところは自分できれいにしようと思う	3.45	3.79	-2.59	37	*
11	学校のトイレは気持ちいいと思う	1.95	3.16	-8.53	37	
12	学校のトイレ掃除をやりたいと思う	1.71	3.61	-9.36	37	
13	学校でトイレに行くのは恥ずかしくないと思う	3.92	4.03	-0.66	37	
14	学校のトイレで大便をするのは恥かしくないと思う	3.21	3.63	-2.92	37	**

**は $p < .01$ *は $p < .05$

5. まとめと課題

(1) 市民科のプログラムとしての意義

本プログラムは市民科が設定する身につけさせたい力の領域「自己管理」「人間関係形成」「自治的活動」「文化創造」のテーマにも沿うことができ、「トイレ」という学校空間の必須施設を教材にしたことは、子どもたちが「学校」という社会でひとつの役割を担うことを体感する機会となった。トイレ掃除やアンケート調査などのプログラムを実行することは実質的にトイレをきれいにし、他学年に対する啓発活動となっており、学校トイレが抱える問題を解消する方向へ導いてくれた。E.デュルケムのいうように「学校は小さな社会である」。学校という社会が必要としている役割を子どもたちが担うように計画されている本プログラムは市民科のプログラムとして十分意義のあるものであると考えられる。以下具体的にプログラムの効果をまとめた。

① トイレ掃除の効果

トイレ掃除には、トイレ空間そのものがきれいになるという物質的な変化が伴うが、その変化は子どもに

大きな達成感をもたらし、当初トイレ掃除に対して否定的な意識を持ち、嫌悪感を示していた子どもでも、ほとんどが掃除後には肯定的な意識に変化し、何か成長したような感覚の経験、責任感・達成感、自立心を芽生えさせることがわかった。また「いやだ」と思っていることにあえてチャレンジすることが、意外な楽しさや、満足感を子どもにもたらし、それが子どもをメンタル面で大きく成長させると考える。

② 活動に対する評価と成果のフィードバックがもたらす効果

5年生が行った一連の活動に対して、他学年の児童からの評価を与えてやることで、学校という社会で、5年生自身が一人の市民として貢献し、責任を果たすことを模擬体験できたのではないかと考える。

今回の場合、他学年の評価はほとんどが5年生の活動に感謝する内容のものであり、5年生にとっては相当な励ましになっていた。これらはバンデュエラの言う自己効力感の起源である「社会的な説得」に当たる。5年生は自らトイレ掃除をしたことで何か成長したような感覚を経験しており、効力感の確固とした信念を作り上げたといえる。そして他学年から感謝されることで、より努力したいと思うようになっていた。自分

が行為の主体であると確信していること、自分の行為について自分がきちんと統制しているという信念、自分が外部からの要請に対応しているという確信が自己効力感であるから、活動に対する評価をフィードバックすることは子どもの自己効力感を高めることに大きく貢献しているといえる。他学年からの評価によってトイレ掃除の印象が180度変わる5年生もおり、他者からの評価が個人の自信を高め、自治的な活動を促進するためには重要であることがわかった。

③ 他学年とのインタラクションがもたらす効果

本プログラムでは、主体となる5年生と他学年が常にやりとりをして、情報収集、報告・発表、評価を行うしくみになっている。5年生のための学習プログラムではあるが実際は全校児童がプログラムに参加していることになった。評価をする側の子どもも多くは「学校のトイレをきれいに使う」とアンケートで答えており、自由記述の中には「私たちも5年生になったらトイレをきれいにします。」というものがあつた。これは自己効力感の起源である「社会的なモデリング」に相当し、5年生が活動する姿を見ることで、他学年の子どもがトイレをきれいにすることを動機づけられたと考えることができる。

それと同時に5年生は活動を通して他学年の意識を啓発することに成功したことになり、これは自己効力感の起源である「熟達の経験」に当たり、5年生と他学年の子どもたちは互いに高めあう結果となった。

④ 学校トイレが抱える問題を解消する効果

本プログラムの5年生自身の目的は、文字通り「学校のトイレを気持ちよく使うために考える」であるから、目的を達成するためには全校児童の理解と協力が必要であり、彼らの意識を啓発できたということは5年生のプロジェクトは成功であったことを意味する。これは5年生が「学校」という社会で起こっている問題をプログラム中の役割を果たすことで実践的に解決の方向に導いたことを意味する。

(2) 本プログラムの課題と可能性

1. 他の学年にアンケートを頼んだり、感想を求める内容になっているため、毎年同じプログラムでは面白みが薄れてゆく可能性がある。プログラム自体も発展させながら、毎年作り変えてゆく必要がある。
2. 子ども達から画期的なアイデアが出るのがし

ばしばあるが、時間や授業の体制上かなえるのが難しいことが多い。たとえば、5年生が前年の経験者である6年生からアドバイスを受けることや、他の学年に対して掃除の指導を実施すること、掃除当番を自分たちで編成し、掃除を定期的に行うなどは実際に子どもから出たアイデアであるが、これらを実行させるには、柔軟な時間的体制、指導側の人的体制が必要になる。子ども達から芽生えた自治的活動をどのようにサポートして盛り上げていくか、プログラム終了後もそれを活かせるようなしかけができることより興味深い展開が期待できる。

3. 用務主事、保護者、地域ボランティアなどサポーターの協力が得られれば、プログラムをより豊かで濃い内容にすることが可能である。
4. 今後の可能性としてトイレ以外の施設へとテーマを広げてゆくことも考えられる。
5. 本プログラムから発展して、子ども達の自治的活動として学校内に「保全センター」的な組織を運営することができれば頼もしい。さらに複数校で同じ取り組みをすれば、学校間でそれらの情報交換ができるようになり、興味深い相互交渉の場ができるだろう。

(おわりに)

城南小学校には、ハードなカリキュラムを組んでおられる合間に本プログラムを導入していただき、大変感謝しています。16年度担任の井村季子先生、17年度担任の伴博司先生には心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

文献

- Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. Cambridge University Press.
- Durkheim, É. (1976). *教育と社会学*. 佐々木交賢訳, 誠信書房.
- 持田良和. (2000). *社会化とく子ども>の「しごと」-歴史社会学的考察のための試論*. 亀山明・麻生武・矢野智司(編), *野生の教育をめざして* (p. 226-243). 東京, 新曜社.
- 森和代・堀野緑. (1997). *絶望感に対するサポートと達成動機の効果*. *心理学研究*, 68, 197-202.
- 村上八千世・根ヶ山光一. (2004). *なぜ小学生は学校のトイレで排便できないのか*. *学校保健研究*,

46, 303-310.

品川区教育委員会. (2005). 品川区小中一貫教育要領.
東京. 講談社.

品川区. 品川区における小中一貫教育の基本的な考
え方. 教育委員会ホームページ
(村上八千世 Eメール: ymcomfort@aol.com)